

# ヒャルチベット語松潘・山巴 [sKyangtshang] 方言の格体系

鈴木 博之

キーワード：ヒャルチベット語、格体系、能格

[要旨] 本稿では、中国四川省松潘県で話されるヒャルチベット語山巴 [sKyangtshang] 方言における格とその用法の包括的な記述に向けての素描を提示する。S/A/P を標示する格と S/A/P を標示しない格に分けて記述を進め、また特に能格の用法に注意して考察を試みる。

## 1 はじめに

本稿では、鈴木・供邱澤仁 (2009) に続いて、中国四川省阿壩藏族羌族自治州松潘県で話されるヒャルチベット語山巴 [sKyangtshang] 方言の格体系の記述を行う<sup>1</sup>。ヒャルチベット語に属する方言の格体系は先行研究によって明らかにされてはいない。本稿はその不足を埋める性格も持つ<sup>2,3</sup>。

チベット語は文語・各種方言ともに特定の条件下で動作主が能格で標示されるという特徴をもつ言語である。ところがヒャルチベット語では、必ずしも能格標識が現れない<sup>4</sup>。この点で本稿では、sKyangtshang 方言の格体系の素描とともに、特に能格に注目し、その用法について考察する。

## 2 格標識一覧

### 2.1 格標識の形態に基づく一覧

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
gə		属格
ɣə	能格	具格
ɣe	与格	与格/位格
nɛ: / nə		奪格
ɕã <sup>m</sup> bo		比較格
無標 (φ)	絶対格	(位格)

以上のうち、能格/具格および位格/与格はそれぞれ形態的に同じである。ただし格の機能、そして格標識の脱落の可否において異なるため、分離して扱う。なお、与格/位格は実際の発音上しばしば [ɣə] になる<sup>5</sup>が、格標識自体を発音すると [ɣe] となるため、/ɣe/とする。属格もまた、初頭子音が弱化し [ɣə] と発

<sup>1</sup> sKyangtshang 方言の概況は同論文を参照。ヒャルチベット語のチベット語方言群における位置づけは鈴木 (2009) を参照。

<sup>2</sup> 本稿の構成は澤田編 (2010) になるべく近づけている。同書には他のチベット語の格体系として、海老原 (2010)、星 (2010)、鈴木 (2010) が収められている。

<sup>3</sup> ただし sKyangtshang 方言がヒャルチベット語全体を代表する格体系を備えているかどうかもまた明らかにされていない。「ヒャルチベット語」という区分は筆者が提唱しているものであるから、周辺のヒャルチベット語諸方言やアムドチベット語、カムチベット語諸方言における格体系との対比も必要な作業である。

<sup>4</sup> 一方、動作主を強調する目的でかなりの程度語用論的に能格標識を用いるチベット語方言もある (鈴木 2010)。

<sup>5</sup> 実際鈴木・供邱澤仁 (2009) では与格をɣəと統一して記述した。

音されることもある。音声学上の変異を考えると、属格/能格/具格/与格/位格は事実上同一になることとなる。

一方、絶対格は無標であり、例文中に  $\phi$  で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なるため、例文中に  $\phi$  で示すものが位格と判断されることもある。

## 2.2 格標識と人称代名詞

人称代名詞の単数<sup>6</sup>および人を尋ねる疑問代名詞については、格によって音形式が変化する。

格	格標識	1人称	2人称	3人称	誰
絶対格	無標	ŋa / °ŋa	°tɕʰəʔ	tə / °kʰo	°sʰu
属格	gə	ŋə	°tɕʰi gə	°ti gə / kʰo gə	°sʰu
能格	γə	ŋi	°tɕʰiʔ	°ti / °kʰə	°sʰu
その他	γe など	ŋa γe	tɕʰəʔ γe	te γe / kʰo γe	°sʰu γe

1人称属格、疑問詞属格、各人称能格の場合は格標識を用いない1音節形式となる。疑問詞の場合、絶対格と能格は区別されない。

なお、話者によっては1人称単数能格を [ŋe] と発音する場合がある<sup>7</sup>。また、2人称の (°)tɕʰəʔ という形式は、人によっては (°)tɕʰoʔ となる場合もある。3人称形式は tə rə や kʰo rə というように rə を挿入する人もいる。これは格標識が独立の音形をもつ場合、格標識の直前に挿入される。

## 3 S/A/P を標示する格と用法

sKyangtshang 方言において、S/A/P は絶対格、能格、与格のいずれかで標示される。ただし、与格による標示の出現頻度は低い。

### 3.1 格と用例

#### 1. 絶対格

自動詞の主語、他動詞の被動作主、感情動詞の主体、対象、自動詞の被使役者などを表す。場合により他動詞の動作主も絶対格で現れる。

自動詞の主語

- (1) ŋa            ʰdɔ-go  
私 [絶]    行く-[未来]  
私は（これから）行きます。

- (2) nã    ϕ            mboʔ-γə  
雨    [絶]    降る-[状]  
雨が降っています。

<sup>6</sup> 人称代名詞複数の場合は、語構成として必ず複音節であり、語末音節は tɕʰo である。この要素は音変化せず、各種格標識が後続することで格を表す。

<sup>7</sup> sKyangtshang 方言において、通常/i/は [e] を異音に含まない。

### 他動詞の被動作主

- (3) ɲi      °tɕʰəʔ    ϕ      ʰdzaɸ  
私 [能]    あなた    [絶]    叩く  
私はあなたを叩きます。

- (4) ɲi      pe: jɪɸ                    ϕ      °coŋ    ma-ŋõ  
私 [能]    チベット文語    [絶]    学ぶ    [否]-[経]  
私はチベット文語を学んだことはありません。

### 感情動詞の主体、対象

- (5) ɲa      °tɕʰəʔ    {ϕ / γe}      ʰga  
私 [絶]    あなた    {[絶] / [与]}    愛する  
私はあなたが好きです。

### 他動詞の動作主

- (6) ʰta ʃʰi:    {ϕ / γə}                    °tɕʰəʔ    ϕ      ʰdzaɸ  
[人名]    {[絶] / [能]}    あなた    [絶]    叩く  
タシはあなたを叩きます。

- (7) ʰdza ʰtsʰo    {ϕ / γə}                    tɕʰəʔ    γe      °tɕə tsə    ϕ      ɕi-te  
[人名]    {[絶] / [能]}    あなた    [与]    何            [絶]    与える-[完]  
ジャンツォはあなたに何をあげたのですか？

### 自動詞の被使役者

- (8) °ti      °ɲa      °tsʰə re    °xʰoɸ    ʰdzoɸ-γə  
彼 [能]    私 [絶]    こちら    来る    させる-[状]  
彼は私を来させます。

また、述語動詞文<sup>8</sup>の主語、述語を構成する名詞句はともに絶対格で標示される<sup>9</sup>。

- (9) ɲa      peʔ                    ϕ      jɪ  
私 [絶]    チベット人    [絶]    [判]  
私はチベット人です。

- (10) ɲa      °ɕʰə    nə    ϕ      joʔ  
私 [絶]    家    中    [位]    [存]  
私は家の中にいます。

## 2. 能格

他動詞の動作主を表す。能格をとる動詞の場合、主語が人称代名詞単数の場合はほぼ確実に能格で表示されるが、一般の名詞の場合は能格標識を用いるかどうかは任意で、発話の意図により選

<sup>8</sup> 「述語動詞」とは、星 (2003:5) の定義を参考にする。述語動詞文とは、いわゆる判断動詞と存在動詞を用いる文のことをさす。

<sup>9</sup> ただし位置を示す名詞の後は位格と分析される。詳細は後述の位格の項を参照。

択可能である。ただし動作主、被動作主ともに名詞の場合、動作主には能格標識が付加されることが多い。能格をとる動詞は、たとえ発話に被動作主が現れなくとも能格で標示されうる。

(11) ɲi        °tɕʰəʔ    {φ / γe}    peʔ hkɛʔ    φ        °h tso-go  
私 [能]   あなた    {[絶] / [与]}    チベット語    [絶]    教える-[未来]  
私はあなたにチベット語を教えます。

(12) °h ta fʰi:    γə    dɕ: ma    φ        f̂ dzaʃ  
[人名]    [能]    [人名]    [絶]    叩く  
タシはドマを叩きます。

(13) ɲi        mə    le:  
私 [能]    [否]    する  
私はしません。

(14) °tɕʰiʔ        °tɕə tsə    φ        le:-go  
あなた [能]    何        [絶]    する-[未来]  
あなたは何をするつもりですか？

また、使役文の使役者も能格で標示される<sup>10</sup>。

(15) ɲi        te    γe    za ma    φ        °h tɕʰaʔ-tə    °tɕʰuʃ-ŋō  
私 [能]    彼    [与]    ごはん    [絶]    食べる-[名]    させる-[経]  
私は彼にごはんを食べさせたことがあります。

### 3. 与格

感情動詞の感情の向かう対象を表す用法と、被使役者を表す用法がある。前者については出現頻度が低く、与格標識は往々にして省かれる<sup>11</sup>。

感情動詞の感情の向かう対象

(16) ɲa        °tɕʰəʔ    {φ / γe}        f̂ ga        = (5)  
私 [絶]    あなた    {[絶] / [与]}    愛する  
私はあなたが好きです。

他動詞の被使役者

(17) ɲi        te    γe    za ma    φ        °h tɕʰaʔ-tə    °tɕʰuʃ-ŋō        = (15)  
私 [能]    彼    [与]    ごはん    [絶]    食べる-[名]    させる-[経]  
私は彼にごはんを食べさせたことがあります。

以上、格標示の具体例を示したが、次に動詞連続の場合について解説する。sKyangtshang 方言では、「～することが好きだ」「～して行く」「～しに来る」などは、単純な動詞連続で表すことができるが、そ

<sup>10</sup> sKyangtshang 方言の使役文は動詞に使役を表す助動詞的要素 °tɕʰuʃ / f̂ dzoʃ を加える方法とともに、使役の内容を表す動詞句を名詞化して「させる」を意味する動詞 °tɕʰuʃ を置いて形成される。後者の場合、使役者が能格で標示されるのは、動詞 °tɕʰuʃ が能格での標示を要求していると考えられる。

<sup>11</sup> 話者によっては、この与格による表示を文語やアムドチベット語などの外的要因による形式とし、sKyangtshang 方言の形式ではない、とみなすことがある。

の場合、動作主（主語）は「愛する」「行く」などでは絶対格に置かれるはずであるが、実際は「～する」の部分（第1の動詞）が能格をとる場合は能格で標示されることがある。

(18)    ʎi            °tɕo<sup>h</sup>tsə    ϕ    le:        <sup>fi</sup>ga  
私 [能]   テーブル   [絶]   作る   愛する  
私はテーブルを作る（修理する）のが好きです。

(19)    °nə    ko zē    nə    ϕ        °tɕ<sup>h</sup>iʔ            °k<sup>h</sup>ɯ        °s<sup>h</sup>oŋ  
これ   服        この   [絶]   あなた [能]   かつぐ   行く  
この服はあなたが持っていきなさい。

ただし、動詞連続を形成しない以下のような場合は、最後の動詞の要求する格が現れる。

(20)    ʎa            tə tɕ<sup>h</sup>o    ϕ        °hta-tə        <sup>ni</sup>qo-γə  
私 [絶]   彼ら        [絶]   見る-[名]   行く-[状]  
私は彼らを見に行く途中です。

### 3.2 能格の用法

sKyangtshang 方言では、先に述べたように、一定の他動詞の動作主が能格で標示されるが、必ずしも能格標識が現れるわけではない。その場合は格標識として音形が存在しなくなるため、絶対格とみなされうる<sup>12</sup>。

現段階の調査では、能格標識の有無そのものが発話において意味的に大きな影響を与えることはないと思われるが、以下の場合には能格での標示が通例のようである。

- (a) 動作主が人称代名詞単数の場合
- (b) 動作主、被動作主ともに名詞の場合
- (c) 述語が非未来を表している場合
- (d) 動作主の有生性が高い場合

(a) 動作主が人称代名詞単数のときは、能格をとることのできる動詞ならばほとんどの場合で能格形が用いられ、絶対格形を用いると非文と判断されることもある<sup>13</sup>。

(21)    {ʎi / \*<sup>fi</sup>ʎa}                    °hta f<sup>h</sup>i:    ϕ        <sup>fi</sup>dzaʃ  
{私 [能]/\*<sup>fi</sup>私 [絶]}   [人名]   [絶]   叩く  
私はタシを叩きます。

(b) 動作主、被動作主ともに名詞のときは、動作主を明示する必要性から、能格標識が用いられるという見方ができるが、実際の言語使用では能格標識が省略されることも高い頻度で見出せる。そのような場合、発話において動作主/被動作主が自明であることに起因する可能性が高いが、必ずしもそうではないこともある。

(c, d) 述語が非未来を表しているという場合と動作主の有生性が高い場合は先に述べなかったが、収集

<sup>12</sup> なお、Nicolas Tournadre 氏（個人談話 2008）によれば、チベット語はそもそも一定の動詞の動作主が能格で標示される構造を原初から持つ言語であるとし、sKyangtshang 方言のような能格・絶対格標示の揺れについて、能格標識の脱落によるものであると考えることを妥当とする。

<sup>13</sup> 母語話者それぞれによって判断基準が違い、絶対格形を許容する人もいるが、絶対格形は文法的に非文とみなされないものの、発話として不自然さがあるという判断になる。

なお、人称代名詞の場合は能格標示の形態がいわば曲用という形式を取るため、独立した音形式を持つ能格標識を用いる場合とは異なって取り扱う必要性もあるだろう。また、この人称代名詞の事例は上注で述べた Tournadre 氏の見解を支持する1つの根拠ともなりうる。

した例文での能格の現れから判断すると、能格をとることのできる動詞で、その動詞が表す動作がすでに起こり継続または完了している場合、能格標識が未来すなわちこれから起こることを表す場合と比べてよく現れることがいえる<sup>14</sup>。また、動作主が人間または人格をもつと考えられる場合は能格がよく現れることがいえる。これらに関連するものとして、以下のような例があり、能格が現れることに違和感があるという母語話者の判断も見られた。

- (22)    °zoɸ    {φ / ?γə}    °hɬsa    φ    ʰdze:-tʰə  
          牛    [[絶] / ?[能]]    草    [絶]    食む-[完]  
          牛は草を食べました。

以上の文では、「動作主、被動作主ともに名詞」で「述語が完了を表す」という2つの能格が現れやすい環境にあるが、動作主の「牛」は有生性が人間より低く、かつ動作主/被動作主の関係が常識の範囲内で固定されているなどの状況が動作主を能格で表示しにくい原因になっていることが考えられる。

## 4 S/A/P を標示しない格と用法

### 1. 属格

主に所有、所属、属性などの関係を表す。

- (23)    ɲə    °hka: jə:  
          私 [属]    碗  
          私の碗

- (24)    °h[ɑ fʰi:    gə    °su  
          [人名]    [属]    本  
          タシの本

なお、「～の（所有する）もの」という表現は、属格標識の代わりに名詞化接辞 tə がつくことで成立する。ただし注意すべきは、人称代名詞類の場合は属格を示す形式に tə がつく点で、その際 gə を伴う場合は gə を脱落させる。

- (25)    °shu-tə  
          誰 [属]-[名]  
          誰のもの（ですか？）

- (26)    {ɲə / °tɕʰi / °hlo zəŋ}-tə  
          {私 [属] / あなた [属] / [人名]}-[名]  
          {私 / あなた / ロゾン}のもの    注<sup>15</sup>

cf. \*°tɕʰi gə-tə  
          あなた [属]-[名]

### 2. 与格

S/A/P を表さない場合として、受領者を表す用法がある。形態的には位格と同一であるが、格標識が脱落するのはまれである。

<sup>14</sup> しかし動作が完了している場合でも能格が現れない場合もある。cf. 例文 (7)。

<sup>15</sup> 2人称単数属格は°tɕʰi gəの2音節で構成されるが、第1音節の形式が属格に特有であるため、この例文の語積では°tɕʰi に対して「あなた [属]」とした。

(27) ɲi      °tɕʰəʔ    γe    ɕĩ  
私 [能]    あなた    [与]    与える  
私はあなたにあげました。

(28) ɲi      te    γe    dzi:-tʰə  
私 [能]    彼    [与]    言う-[完]  
私は彼に言いました。

### 3. 位格<sup>16</sup>

位置とともに着点も表す。形態的には与格と同一である。実際の発話では格標識が脱落する場合があるが、それは位格で標示されるべき名詞句が絶対格になる、ということの意味しているわけではないため、文意によって音形がない場合も位格と解釈する必要性がある。一方、動詞「行く」などと共起する位置を示す名詞句に位格標識がつくのは不自然と判断されることがある。

(29) tɕõ<sup>n</sup>dzə    γe    tɕa    °hnoŋ    gə  
コップ    [位]    茶    [存]    gi  
コップにお茶があります(入っている)。

(30) °tɕʰəʔ      ta la    ke:χaŋ    {φ / °γe}      ʰdɔ-<sup>fi</sup>dza  
あなた [絶]    今    街      {[位] / °[位]}    行く-[未来+疑] 注<sup>17</sup>  
あなたは今街へ行くつもりですか？

また、nə / nō 「中」、tʰoɕ / ʰgo 「上」など場所を表す特定の要素は位格標識を伴わず句中において場所を表せる。その際には、それぞれに先行する名詞との間にも属格など他の格標識を挿入することはない<sup>18</sup>。このような特定の要素が付加されているものは、自動的に位格標識が脱落したものと考える<sup>19</sup>。

(31) °tɕo<sup>h</sup>tsə    °tʰoɕ    φ  
テーブル    上      [位]  
テーブルの上に

(32) ʰdɔ ma    tɕaw sə    nə    φ    °hnoŋ    gə  
[人名]    教室    中    [位]    [存]    gi  
ドマは教室の中にいます。

<sup>16</sup> 鈴木・供邱澤仁(2009)では、ここでいう「位格」も「与格」として語釈を与えたが、本稿では格標識の脱落の可否という観点から「与格」と「位格」を分けることにする。S/A/Pに関わる与格は格標識が脱落するが、S/A/Pに関わらない与格は基本的に格標識が脱落しない。位格はかなりの程度格標識の脱落が許容される。

<sup>17</sup> 文末の<sup>fi</sup>dzaは未来を表す接辞<sup>fi</sup>dzəと疑問小辞?aの縮約形式である。疑問小辞?aは通常動詞もしくは助動詞に先行するが、sKyangtshang方言ではときどき文末に置かれる現象が見られる。

<sup>18</sup> ゆえに、これらを「場所名詞」というカテゴリーを設けて普通の場所を表す名詞と区別する必要がある。「場所格」を細分化してそれぞれ格標識の形式とみなす考え方もありうるが、現段階ではこれらの要素がすべて名詞由来であり、複数の語形が同一の「上」などの意味カテゴリーに並存するものがあるため、「格」と呼ぶまで文法化が進んでいないものとする。

<sup>19</sup> この場合に位格標識が顕在化するのとは不自然であると判断される。

#### 4. 具格

道具、手段を表す。形態的には能格と同一である。格標識が脱落することはない。

- (33) tə tʰoŋ γə tʰe: φ ʰtuʔ  
 ナイフ [具] 野菜 [絶] 切る  
 ナイフで野菜を切る

#### 5. 奪格

空間的な起点を表す。格標識は nə である<sup>20</sup>が、強調して発音する場合 ne: と発音される。

- (34) ʰkʰo koŋ na nə fi-nə reʔ  
 彼 [絶] どこ [奪] 来る-[名] [判]  
 彼はどこから来たのですか？

- (35) ŋa zō tʰu nə fi  
 私 [絶] [地名] [奪] 来る  
 私は松潘から来ました。

#### 6. 比較格

比較の対象を表す。比較格の格標識は通常 ɕã mbo であるが、人によっては fia ʰdʒi という形式を用いる人もいる。

- (36) ʰta fʰi: ʰdo dze ɕã mbo tʰe-γə  
 [人名] [人名] [比] 大きい-[状]  
 タシはドジェより（体格が）大きいです。

#### 略号表

[絶] .....	絶対格	[判] .....	判断動詞
[能] .....	能格	[存] .....	存在動詞
[与] .....	与格	[進] .....	進行
[属] .....	属格	[状] .....	状態
[位] .....	位格	[完] .....	完了
[具] .....	具格	[経] .....	経験
[奪] .....	奪格	[否] .....	否定辞
[比] .....	比較格	[疑] .....	疑問小辞
[名] .....	名詞化標識		

<sup>20</sup> nə という音形式は「中」を意味する場所名詞や人を表す名詞化接辞のそれと同一になるが、文脈もしくは動詞との関連から意味の混乱は起きないようである。



付録：sKyangtshang 方言の音体系

超分節音

レジスター 2 種が認められる。

緊張性 (°で示す)

弛緩性 (無標)

母音

以下の各要素について、長/短および鼻母音/非鼻母音の対立がある。

i	u	ɯ u
e	ə ə	o
ɛ	ɔ	
a	ɑ	

子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧は以下のようである。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	tʰ		k <sup>h</sup>	q <sup>h</sup>	
	無声無気	p	t	t̚		k		ʔ
	有声	b	d	d̚		g		
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tɕ <sup>h</sup>			
	無声無気		ts		tɕ			
	有声		dz		dʒ			
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>		ɕ <sup>h</sup>	f <sup>h</sup> / x <sup>h</sup>		
	無声	ɸ	s	ʂ	ɕ	x	χ	h
	有声		z		ʒ	ɣ	ʁ	ʕ / fi
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ		
流音	有声		l, r					
半母音		w			j			

- /f<sup>h</sup>/ : 前部硬口蓋および後部軟口蓋における同時調音による無声摩擦音
- /ʕ/ : 有声咽頭蓋音摩擦音

子音連続として、主に前鼻音と前気音が見られる。

## 参考文献

海老原志穂 (2010) 「アムド・チベット語の格体系」澤田編 43-64

澤田英夫編 (2010) 『チベット=ビルマ諸言語の文法現象 1：格とその周辺』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

鈴木博之 (2009) 川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類 《漢藏語學報》第 3 期 17-29

—— (2010) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言 (丹巴県) の格体系」澤田編 95-108

鈴木博之・供邱澤仁 (2009) 「ヒヤルチベット語松潘・山巴 [sKyangtshang] 方言における *snang* の用法」大西正幸・稲垣和也編 『地球研言語記述論集』 1, 123-132

星泉 (2003) 『現代チベット語動詞辞典 (ラサ方言)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

—— (2010) 「チベット語ラサ方言の格標示形式の体系」澤田編 65-93

## [付記]

本稿の草稿段階において澤田英夫氏より有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表す。

筆者による言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)

なお、本稿の記述は、漢語からの翻訳形式から採取したものと sKyangtshang 方言話者の自然発話の中に観察された用法を総合的に判断して行った。また、容認度の判断に関わる調査には、主にコンチョ・ツェリン (供邱澤仁) [dKon-mchog Tshe-ring] さん、ソナン・チョンチ [bSod-nams Khyung-skyid] さんに協力していただいた。